

# 大鹿スケッチ

第52号  
2015年  
2月  
〈 発信者 〉  
前志満 くみ  
〈 提供 〉  
旅舎 右馬允

なんだかんと言った、今のところ雪も控えめで、暖かい冬だと思っている。先日、仲間ともに村内にできる氷ばくを見に行った。数日前に降った雨で崩落した氷の束が横たわっていて、見上げると新たに形成された氷が岩肌を覆っている。凍る途中の氷は水が重力に沿って流れている様子をそのままに留めていて面白い。リース状の模様が印象的な鉱物、ブルーリースアゲートが思い出された。



## 「リニア工事」が始まる

「調査」と言われる「着工」の現場！

二月一日「水平ボーリング地質調査」が行われている釜沢の現場に足を運んだ。小河内沢の左岸に設けられた工事現場ではこの日、工員が七、八人で作業にあたっており、敷地内にはモーターの音が響いている。工事現場は防音壁が設けられていたものの、谷底にありながら肝心な上部が覆われていないため拡声器のような状態になっている。上の集落にはどのよう

なもののから四季折々変化に富む景観、その神秘性。それと対照に災害の恐怖もまた山からの贈り物と言えよう。信仰が生まれ、独特の精神文化が根付いた。大鹿村の民は、いわば山岳民族だ。山に生かされてきた。現在、大鹿村に根付く文化の元は「赤石山」にあると考える。

JR東海にとつては、たかが直径二十センチのボーリングかも知れない。しかし地元住民の中には自分の体を挟まれているような、いたたまれない気持ちになる人だっていることを工事関係者はまず理解すべきだろう。JR東海は住民の「理解と同意を得られなければ着工はしない」という。彼らが本当に住民側

のボーリング調査を実施するのにならぬ。できるだけ騒音被害の証人を確保したい。時間があったら釜沢に聞きにきてほしい」彼が会の最後に結んだ。一三日深夜、街での仕事を終えてから友人と乗り合わせで釜沢に向かった。集落の上部にある集会所付近で一度車からおりて聞いてみると発電機のモーター音だろうか、重低音が絶え間なく聞こえてくる。それに混じって時折「カーンカーン」という何か固いものにぶち当たった音も聞こえる。友人と顔を見合せて「こんな音が昼夜だとき凍結を防ぐため掘削機を

J R東海より二四時間のボーリングを行いたいとの申し入れがあったが住民の意見が反映され工事は平日朝から夕方五時までとすることで両者が合意した。また工事関係者は明日から始めると説明しておきながら説明会終了直後から工事を実施している。

二月五日、J R東海より二四時間のテストボーリング実施の打診があった。その際、騒音テストを行い住民の理解が得られれば二四時間の掘削を行いたいという意向を示し、住民はそれを受け入れた。J R東海との窓口は実質上、自治会長の谷口さんが務めているがJ R東海からの日程調整は急すぎるような音が継続的に聞こえてくるのだから、かなりのものだと思います。また発電機が五、六機、

るというが、この穿り出さ

掘はもちろん、家を建てるための資材といった物理的

にたつた「安全で安心でき

「今夜(一三日)、試験的に二四時

工事現場をこうこうと照らして

が始まることになる。

すべてのものを覆い尽くす雪に、私たちはしばらく身をゆだねるしかない。雪をかき分け、もみ殻の中から今日いたたく大根をとりだす。貴重な日中の陽光だまりの中で秋に拾った才二ぐるみをたたき、貴重な油分をとりだす。人の生活の一方で山の動物たちも命をつなぐのに一生懸命。今年にはカモシカの親子までやってきて紙谷さんの桑の木を食べて行った。樹液を蓄えた桑は美味しいらしい。



## 大鹿 HeatBeat

～大鹿の人々～ 第50回

紙谷 正 さん (88)

季節ごとの風景と共に大鹿人の生活をご紹介します。紹介します。淡々とした日々の中に熱く響く「鼓動」をお届けします。